

「久慈川水系河川整備計画（原案）」に対する公聴会

日 時：平成 30 年 4 月 23 日（月） 10:00～10:20

場 所：国道交通省関東地方整備局常陸河川国道事務所

発言者：公述人 1

皆様おはようございます。私は水戸市在住の■と申します。どうぞよろしくお願い致します。

今回の「久慈川水系河川整備計画（原案）」を拝読しまして、国交省の皆様を始め、各関係機関の方々の御努力と御心労には心から敬意を表します。

それではまず、私が単純に思う事ですが、整備計画にありますように「治水」・「利水」・「環境」と三つの基本理念をメインに様々な工事管理の方法を模索し計画した事で、私達、河川沿川に住む人々にとっては、安全・安心で健やかに過ごすことが出来ます。もし整備計画が無かったらと考えたら体、心が凍る思いです。それどころか人々が生活するのに最適な場所と思うこの沿川に住むことが出来なくなってしまいます。

ここで皆様もよく御存知でしょうが、久慈川の概要を簡単にご紹介します。その源を福島・茨城・栃木の境界に位置する八溝山。標高 1,022m ありますが、そこから発し福島県の山間部、そして八溝山地、阿武隈山地の間を流下し茨城県に入り、山田川・里川を併せて太平洋に注ぐ幹線流路延長 124km、流域面積 1,490km² の 1 級河川でございます。

これから話をしてく上で、どうしても気候の変化を述べなければなりません。近年、地球温暖化に伴う気象変動により、強風・大雨による大きな災害が起きると予想されます。我が日本でも気候が以前には温帯性気候と私達、学生の時に学習しましたが、現在では亜熱帯性気候になっているという人さえおります。雨量も時間雨量 50mm を超える事や総雨量が数百ミリになる事が珍しくない状況であります。以上の気象状況により河川施設能力を上回り、外力による水害が発生すると考えられます。

では、具体的な課題に移りたいと思います。冒頭でも述べましたように「治水」・「利水」・「環境」と大別されますが、その中の「治水」についての工事と管理関係の思うところを話していきたいと思います。

まず「掘削・築堤工事」について意見を述べます。整備計画の中に河道掘削は「洪水を安全に流下させるために必要な箇所において河道の安定・維持及び魚類・動植物が生息・生育・繁殖を行う良好な河川環境の保全を考慮しつつ実施する。なお、河道掘削により発生する土砂は築堤への有効利用を図りコスト縮減に努める」とあります。誠に道理に適った計画だと思います。関係者の方々には既によく御存知でしょうが、あえて言わせてもらおうと、一つ目として、掘削土を築堤工事に利用すると言っても土質が適合してなければ、これは成立しない。土質に合った利用方法を考えるという事になると思います。例えば側帯とか水防の防災ステーションとか、例えば畑作にとか、そういう事を考えられると思

ます。二つ目として、掘削と築堤工事は一連工事です。掘削土をそのまま築堤工事に利用すれば、最大のコスト縮減となるわけです。しかし予算の問題や、その他様々な条件によって掘削工事と築堤工事が同時期に出来ない事も多々あります。こういうケースでは適当な箇所に仮置きをして再利用するというような事になると思います。また掘削と築堤工事が数箇所あって、配土計画を考える時に運搬距離が近い所に設定する事が一番経済的になる訳です。それは誰が考えても分かる訳ですが、どなたも仕事が掛け持ちして、忙しく働く中で勘違いも有ると思います。そこは肝に銘じて誤解の無いように切に経済的な運搬という事を考えていただきたいと思います。それから三つ目として、掘削土は存在しますが築堤箇所が非常に遠方の場合でコストが割高になるという場合があります。以上のような場合は購入土による築堤工事にならざるを得ない。当然でございますが土質検査を行い、よく吟味して、より近い場所より購入してコストの縮減を図ってほしい。

次に河川管理についてですが、整備計画によりますと、久慈川では樋管 53 箇所、床固め 5 箇所、河川施設があり、樋管は 50 年以上経過した樋管が全体の 6 割を占めている。老朽化により機能低下が危惧されていると。これらの河川構造物の点検・整備・更新等を効果的・効率的に推進し維持管理していく。また施設操作に関しては、操作規則に基づき適切な操作を行っていく。でも洪水・津波・高潮が発生した場合のバックアップの機能の強化や操作員の安全確保や、高齢化による操作員のなり手不足の観点から遠隔操作や自動化等を進めていくと。同じような問題ですが、災害に備えて活動する水防団や消防団員の減少により水防活動に従事する人間が減少する一方で、期待される水防活動等は、量・質的にも増加しており水防活動を的確に実施する事が難しくなっていくと。その為、危機管理ハード対策と地域におけるソフト対策を並行して実施していくと、このように記述がありますが、私が思うことは、誠に当たり前の意見ではありますが、一つとして河川管理の操作について操作員の人手不足から自動化を進める事は、これ当然の事で効果的な有効手段だと思います。しかし異常気象や災害時の事は、時には災害時には何が生じるか分かりません。もし、この施設が停止するような事態になったら大きな災害に発展することが予想できます。ですから無理を承知で操作員の確保を粘り強く、しかも真剣に取り組んでもらいたいと思います。二つ目として水防に関して、水防団・消防団の減少という記述がありますが、これは世の中の流れとしてやむを得ないと思います。こういう事態の中で危機管理ハード対策、地域のソフト対策を両立して実施する事は適切な方法として賛同します。具体的には越水時にも破堤するまでの時間をかせぐと。その為にはアスファルト化するとか、川裏の法尻が崩壊しやすいので護岸を施工するとか、こういう対策をすと思われれます。自治体のソフト関連、自治体の計画に従い避難あるいは自主避難を実行するという事です。もう一つは洪水時の対策として現況で出来る最大限の組織で水防工法を行うと。増水時の水防は防災・減災に最も有効です。ですから現地においての水防工法の灯は消さないでほしいと思っております。三つ目として、水害に遭わない。これは一つの方法として、浸水区間から離れて台地に移住するという方法も考えられます。しかし、これは経済事情もある

し、長年住み慣れた土地に愛着もあるでしょう。そう簡単には実行できないと思います。
しかし、中長期的には考える必要があるんじゃないかと思っています。

他愛のない細かい事を述べてきましたが、私は久慈川の土砂掘削を考えた時、経済性と
危機管理は必ずキーポイントになるのではないかと考えております。

だらだらとまとまりの無い話をしましたが、私の話はこれで終了します。ご静聴ありが
とうございました。

以上